（様式１）

令和4年度　学力向上指導改善プラン

三田市立狭間小学校長　　佐野　秀樹

学校教育目標	豊かな心で、自ら考え行動できる子の育成
推進主体	学力向上推進委員会 （校長、教頭並びに学校改革、教育計画、学校評価、研究推進、生徒指導、保幼・小・中連携の各担当）

		学力に関する前年度の状況・経年の課題等
学力の状況	全国学力・学習状況調査結果の状況（国語、算数・数学に関する質問紙調査の結果も含む）	国語 ◇話すこと・聞くことの領域は良好な結果で、力がついてきていると思われる。 ◆記述の問題で、話の中心となる語句を見つけて要約したり、目的に応じて自分の考えが伝わるような書き方をしたりすることが苦手な傾向が見られた。また、条件設定に応じた書き方を求められたときに、戸惑っているようである。 ◆文字の情報を読み解くことが苦手なため、問われていることが分からず、意欲を持てない児童が、一定数ある。 ◆書くことに関して、文章での表現の方法が分からず苦手に感じる児童がいる。 算数 ◇グラフや表を活用する問題で、数量や項目間の関係を読み取ったりできている児童が多い。 ◇基本的な計算技能は、おおむね身についている。 ◆式の意味を理解したり、文を読み取り立式したりすることに課題がある。特に、速さ・道のり・時間の関係や、除法の式の意味が十分理解できていないと考えられる。 ◆割合の問題において、単位量あたりの大きさを基に考えることに課題がある。 ◆日常の事象を数理的に捉え数学的に表現・処理することに課題がある。文や図から必要な情報を取り出し、活用することに苦手意識を持っている児童が多い。
	定期テスト、単元テストなどによる状況（各教科）	◇日ごろからの継続的な取り組みが漢字や計算技能の向上につながっている。定期テスト等でも結果となって表れてきたと思われる。
	授業等からうかがえる状況（各教科）	◇授業の流れとして「めあて」と「振り返り」を意識して展開してきた。見通しをもって学ぶ姿勢が身についてきている。 ◇朝学習により、学習へのスムーズな流れが身につきつつある。 ◆学習に対して、やや受け身な傾向にある。主体的に学習に取り組む子どもたちを目指し、授業改善の必要がある
学力向上に係る学習状況・学習習慣・生活習慣等の状況	学校評価などのアンケート調査やこれまでの全国学力・学習状況調査の質問紙の経年変化による児童・生徒の状況	◇◆家庭学習の手引きを年度当初に加え、2学期の初めにも配布し、家庭学習の指標として活用を促した。学級懇談会などでさらに周知する機会が増えるとよい。 ◇「漢字ノートコンクール」や「自由ノートコンクール」を行い、全校生が目にする場所に掲示することで、他者のがんばりを認め、自分の学びに活かそうとする意欲につながった。 ◇学校評価アンケートにおいて、児童の83%が進んで家庭学習に取り組んでいると評価している。 ◆本校独自の振り返りシート「はさまっこノート」で、家庭学習について振り返る項目を作り、自己評価するとともに、家庭との連携を高める。 ◇感染症拡大防止のため、今年度も図書室の開放や図書ボランティアの活動が制限されたが、学校司書や担当教師を中心に、図書室周辺の環境づくりや、選書会・予約会など、児童が読書活動に興味をもつように工夫している。 ◇読書通帳達成賞や年間百冊読書賞、ステージ別読書などを継続して行うことによって、多読につながり、幅広い分野の読書に児童が興味を持っていた。 ◇読書週間の設定で、朝読書により落ち着いて学習に導入できるようになった。 ◆学校教育評価アンケートにおいて、約80%の児童が本を読むことが好きと回答しているのに対して、保護者は52%と開きがある。
校内研究・研修の状況	校内研究の状況	◇単元の目標や評価規準となるルーブリックを子どもと一緒に作成、共有できたことで、子どもの主体的な学びにつながった。 ◇コロナ禍で声を出してのコミュニケーションがされる中、各担任が工夫して授業を行った。特に、ICT機器を用いた授業アイデアを共有することで、授業準備や授業自体の効率化にもつながった。 ◇オンラインを活用し授業公開することで、それぞれが授業を視聴し授業研究会に臨めた。授業研究会での学びが次の研修に活かされた。 ◇研究テーマに沿った指導内容・指導方法の研修を行い、教師間で共通理解を図れた。 ◆授業のアイデアを全教職員で共有していくことが大切である。 ◆活動内容とめあてをさらに明確化していく必要がある。
	校内研修の状況	◇児童理解研修会や、毎月の職員会議や委員会などあらゆる機会をとらえ、全職員が児童一人一人を共通理解する機会をもった。児童の様子や変化を共有し、深い児童理解に努めた。その結果、多くの児童が安心して学校生活を送っている様子が、学校評価アンケートにもあらわれている。 ◇各担当より、計画的に職員研修が行われた。 ◆タブレット端末を活用した授業やデータ処理、統計処理の方法など、積極的なICT機器利用に向けて研修を行い、教員の資質向上に努める。
家庭・校種間連携	家庭・地域等の状況	◇コロナ禍で、保護者や地域の方にボランティアとして学習支援をしてもらう機会を設定できない状態が続いている中、図書ボランティアや登下校の安全指導などできることを工夫して見守っていただいている。 ◇学校地域運営協議会において、児童の学校生活の様子や学校のコロナ対応の様子の見学を通して、児童や学校運営について意見交流することができた。 ◆地域ボランティアと学校をつなぐ、コーディネーター的な人材の確保が難しい。 ◆学校、地域、保護者がそれぞれの立場で、児童に対する役割や連携することの意義について話し合う機会を設定することも必要である。
	小・中における教科連携等の状況	◇専科教員と高学年担任の交換授業による教科担任制で、教師の専門性を生かした授業を行うことができ、児童は興味を持って授業に臨んでいた。 ◇小中連携の意見交流会で、生徒指導上・特別支援上の視点で情報交換を継続的に行っている。 ◇コロナ禍で制限がある中、オンラインや動画を活用した小中交流を工夫して行った。 ◆中学校からの出前授業や研究授業の交流などができなかった。

4月			2～3月	
学力向上に向けての重点的な目標	成果となる目標 （指標となる数値等）	具体的な行動目標 （成果目標達成のための具体的な手立て等）	年度末評価 （今年度の成果と来年度に向けた課題等）	評価
A　個別最適な学び・協働的な学びを意識した授業の確立	・めあて、学習の流れの提示により、ユニバーサルデザインの授業づくりを意識する。 ・めあてを意識した振り返りをさせる。 ・課題設定の工夫、効果的な言語活動、相互交流に重点をおいた授業展開をする。 ・授業形態の工夫をする。 ・主体的な学びに重点を置き、探究的な学びのプロセスを大切にする。	・学習の流れの提示の仕方を校内で統一し、個々が何を、どの手順でどのように学ぶのか、めあて・見通しをもって粘り強く学べるようにする。 ・めあてを意識した振り返りを行うことで、何ができるようになるのか、何ができるようになったのかメタ認知し、自己調整力を養う。 ・個人思考を深めるためには、ペアトーク、グループトークは欠かせない。多人数の学級でも多様な授業形態がとれるよう、ホワイトボードやタブレットの活用など、多様な学習方法も検証する。 ・「わかった」「おもしろい」と思えるような授業を展開する。 ・外国語活動・外国語を中心にルーブリックの作成に取り組み、子どもの疑問を大切に、課題意識を持って取り組めるようにする。	◇学習の流れを明示することで、めあてや見通しが共有され、多くの児童が安心して落ち着いて授業に取り組んでいる。 ◇振り返りの習慣が定着し、自分が何をどこまで学んだか、理解が不十分なところを見つめられるようになりつつある。 ◇「学習に進んで取り組んでいる」「好きな学習がある」という児童が約90%であり、魅力的な授業が子どもたちの評価につながっていると考えられる。 ◇◆タブレットで、自分の意見を書き込んだり、他者の意見や考え方と比べたりする機会を昨年度よりも増やすことができた。その一方で、ペアやグループでの話し合いには活用があまりできておらず、今後さらに思考力を高められるような活用を考えていきたい。 ◆思考力を高めていくために、ペアトークやグループトークを学習に計画的に盛り込んでいく必要がある。 ◆本校の児童の実態に合ったGIGAスクールの構築（学習ソフト、環境）を推進してきたが、さらに誰もが使えるようにしていく。	B
B　思考力・表現力の育成 ○基礎基本の充実	・言語領域、計算などの技能領域の力をつける。 ・四則計算が正確にできる児童の割合を、90%以上にする。	・言語領域（漢字）の学習については、漢字テストなどで日々達成度を確認し、個々のサポートに生かすとともに、隙間時間を利用してミライシードなどを活用することで反復練習を行い、定着を図る。また、意欲的に取り組めるよう、評価を工夫する。 ・計算力をつけるため、継続的なドリル学習やプリント学習で四則計算の定着を図る。また隙間時間にはミライシードなども活用を図る。 ・新学習システム教員との連携や、「がんばりタイム」の活用で、個のつまづきに応じた支援ができるようにする。	◇朝学習や家庭学習で繰り返し練習することで、漢字や計算などの基礎基本の力は定着してきている。算数科では新学習システム教員との連携や少人数学習で、個に応じた指導の効果が出ている。 ◇◆「がんばりタイム」の活用や放課後の補充学習で、個別の指導を工夫した。早期からのつまづきに対応していくため、ドリル的な学習ソフトをより活用していきたい。 ◆学力学習状況調査で、国語・算数とも、話の要旨を読み取ることに課題がある結果となった。要旨を読み取り、短くまとめるなどの活動を行い、言語能力を高めていく必要がある。算数においては、筋道を立てて論理的に考えていくことにも課題がある。自分の考えを発表し、交流する活動を増やし、論理的な思考力を鍛えていく必要がある。 ◆理解したことを自分の中で再構築して表現する機会を増やしていく。	B
○ノートづくり	・自分の考えや友達の考えを記し、思考の流れを残すようにする。 ・図や表を用いながら、問題文の物事や数量の関係をとらえたり、表したりできるようにする。 ・めあてと振り返りを書き、自分についた力を認知させる。	・学年や発達段階に応じたノートのモデルを提示し、図や表・振り返りの書き方など、丁寧に指導する。 ・自らの考え、思考過程、理由、根拠を記述することを習慣化する。 ・振り返りの観点を明確にし、めあてに対する自分の学びについて記入させる。 ・ノートコンクールを全校で定期的に行い、掲示することでお互いの工夫を見つけ、個人のノートづくりに反映させる。	◇漢字ノートコンクールに加え、今年は年間を通して算数ノートコンクールにも全校で取り組んだ。教師の価値づけの記述をつけたり友だちのノートと自分のノートを見比べたりすることで、よいノートづくりに関心を持つようになってきた。 ◇ICT機器の活用により、授業中の必要な時にノートの提示ができるようになり、ノートを使って発表したり、意見を交換したりする活動を授業に取り入れられるようになった。 ◆図や表、グラフや関係図などを関連付けて、テーマ問題を視覚化し、いろいろな角度から解法へとたどり着きやすくする。	
○読む力の育成	・音読表現を工夫することができる。 ・課題に沿って情報を取り出し、イメージとして明らかにすることができる。 ・言葉に関心を持たせ、語彙力を高める。	・接続詞を手掛かりに段落相互の関係や文章構成に着目し、重要語句、登場人物の心情の変化、情景の変化など、教材の特性に合わせて、より焦点化させて授業を展開する。 ・音読カードなどを活用して、継続的・段階的な音読指導を行い相互評価する機会を設ける。	◇文章構成に着目して音読することを心掛けたことで、授業内容理解につながった。 ◆授業の中で、音読の指導が十分にできない現状なので、家庭学習で継続的に音読練習を行い、音読表現ができるようにしていきたい。音読練習のやり方も通読や場面読みなど工夫していく。また、めあてを持って読むようにすることで、文章の内容理解につなげていく。	
○根拠や理由に基づいて考える力の育成をはかるためのカリキュラムマネジメント	・理由や根拠を明らかにして、書いたり話したりすることができるようにする。 ・場に応じた表現の工夫をさせる。 ・友だちと共に考え学ぶことによって、新しい発見や豊かな発想が生まれる授業の工夫をする。	・課題に沿って考え、解決していくために、思考の流れに沿った学習活動を展開する。 ・学習発表の場を設けたり、異学年交流をしたりする中で、相手意識を持たせることで、表現力を伸ばす。 ・プログラミング学習やタブレット等、ICT機器を生かした授業を積極的にすすめる。 ・全校行事「はさまフェスティバル」(3学期)において、教科学習を活かした発表をする。体験型ワークショップで、効果的な表現について学び、コミュニケーション能力を高める。	◇授業のまとめや総合的な学習で、ノートやワークシートに加え、タブレットを活用した表現を児童自身で工夫できるようになってきた。 ◇狭間フェスティバルを全校生で3年ぶりに開催し、教科の学習を活かした発表を児童が積極的にアイディアを出して計画、相手意識を持った表現も見られた。 ◇プログラミング学習を全校的に行い、試行錯誤しながらのプログラミングに興味を持って取り組んでいた。 ◆タブレット活用について、それぞれの学年で身に着けておきたいスキルについてさらに整理し、指導計画を作成する必要がある。教師間で有効な活用法や活用場面を共有し、効果的な活用ができるようにしていく。	
C　家庭学習の習慣の確立と充実	・家庭学習の手引きに基づき学級指導し、家庭へ配布、懇談などで啓発する。 ・家庭学習が授業に活かされるような課題を工夫する。 ・学校教育評価アンケートの、「子ども自らが家庭学習に取り組む」の項目において、75%の達成を目指す。	・家庭学習の指標として、家庭学習の手引き「夢に向かって狭間っ子」を使って、自主学習でどんな内容をどんなふうに学習したらよいか、学年に応じた方法を児童に具体的に示し指導する。 ・「漢字ノートコンクール」や「自由ノートコンクール」などで、自分の学びを紹介・披露したり、友だちの学びからヒントをもらったりして、一人学びへの意欲をもたせるようにする。 ・本校独自の振り返りシート「はさまっ子ノート」で、家庭学習について振り返る項目を作り、学期ごとに自己評価するとともに、家庭との連携を高める。	◇家庭学習について、懇談で家庭学習の手引きを配布し、家庭へ協力を促した。84%の児童がすすんで家庭学習に取り組んだと回答している。基礎学力の定着のためにも、さらに家庭学習を習慣化するように、新たな取り組みを考えたい。 ◇「漢字ノートコンクール」「算数ノートコンクール」を行い、全校生や保護者が目にする場所に掲示することで、他者のがんばりを認め、自分の学びに活かそうとする意欲につながった。 ◆来年度は「はさまっ子ノート」に家庭学習についての文言を入れ、児童自身が分かりやすく振り返りができるようにし、家庭との連携を高める。	B
D　読書活動の推進	・本を読むことを楽しむ児童の増加を目指す。 ・本を資料として活用し、必要な情報を選択することができる（本の紹介、調べ学習など）児童の増加を目指す。 ・学校教育評価アンケートの、「家で読書や読み聞かせに取り組んでいる」の項目において、65%の達成を目指す。	・学校司書・図書ボランティアとの連携をはかり、読書に興味をもてる工夫をする。 ・読書通帳の活用や、ステージ別読書を行って、日常的に本に触れる機会をもたせる。 ・各教科の中で、活用できる本（資料）を提示し、学習活動に広がりを持たせられるよう支援する。図書年間利用計画を各学年で作成し、年間の見通しを持って計画的に読書活動を進める。 ・「狭間っ子読書の日」の週を読書週間とし、朝の帯時間を読書タイムとすることで、読書活動を啓発・推進する。 ・学校だより、学年通信、司書だより、図書だよりなど通して親子読書の日の啓発を行い、家庭と連携して読書活動を進める。	◇学校司書との連携により年間学習計画で必要な図書をクラスに用意するなどし、調べ学習等読書活動の広がりにつながり、図書を活用する機会が持てた。 ◇学校司書と担任が連携した取り組みで、友だちの本の紹介カードから刺激を受けて読書への興味が広がったり、読書通帳やステージ別読書に熱心に取り組んだり、意欲的な姿が多く見られた。 ◇◆今年度家庭読書の定着に向けて親子読書カードに取り組んだが、家庭によって取り組みに差があったので、①子どもだけで読んでもよい。②親のサインは名前のみなど簡単なものにするなど形態を変えて来年度も継続する。 ◇◆図書ボランティアとの連携については、内容を検討しながら続けていく。	A
E　児童理解に基づいた指導体制の確立 ○主体的に思いや考えを表現し合い、高め合う子どもを育成する。	・教材に適した授業展開・指導法を通して、主体的に楽しみながら外国語を学び合う子どもを育成する。 ・自分の思いや考えを豊かに表現するための必要な手立てを、意図的計画的に講じる。	・全教員が授業公開を実施する。 ・研究授業では、事前研修会を持ち、研究課題を明らかにし、ワークショップ型の事後研修会により成果と課題を共有する。 ・毎授業のふりかえりと次授業のめあての提示をする。 ・音声指導を3年生から取り入れ、音声と文字のつながりを意識させ、英語スキルの定着をはかる。 ・自分の思いや考えを豊かに表現するために必要な手立てを、系統だてて実施する。 ・英語において、英語専科・ALTが、単元ごとの目的を共有し、時間ごとにフィードバックするようにして連携を深める。	◇教材に適した授業展開や指導法を工夫することで、児童は主体的に楽しみながら外国語を学んでいた。 ◇英語専科が導入される中で、中学年以下で、何を大切にして授業を計画していけばよいか、個々で考えたり研修を重ねたりすることができた。 ◇コロナ禍においても、感染症対策をした上で、少しずつコミュニケーションを伴う活動もできるようになってきた。ICT機器を用いるなどして、工夫して対話学習を取り入れることができた。 ◇オンラインを活用し授業公開することで、それぞれが授業を視聴して授業研究会に臨めた。授業研究会での学びが次の研修に活かされた。 ◇研究テーマに沿った指導内容・指導方法の研修を行い、教師間で共通理解を図れた。 ◆児童の強みを生かし、弱点を克服できるような研究を進めていくことが大切である。	A
○個に応じた支援を行う。 ○それぞれの教科や、教材の特性を踏まえた授業展開を通して、児童の総合的な力を育成する。	・全ての児童にとって分かりやすい手立てを講じた授業を構築する。 ・研修を教育課題に応じて行うことで、専門性を高める。	・児童理解研修会を年度当初に行い、巡回相談や教育相談を積極的に活用する。 ・研修資料の共通理解と共有行動を図る。 ・各教員の得意な教科や分野、領域、指導法を交流することで、さらなる授業改善を目指す。 ・ICTの研修を定期的に行い、効果的な活用法を交流し、指導に生かすようにする。	◇年2回の児童理解研修会で全職員が児童一人ひとりを共通理解する機会をもった。加えて毎月の職員会議や委員会など、あらゆる機会をとらえ、児童の様子や変化を共有し、深い児童理解に努めた。 ◇各担当より、計画的に職員研修が行われた。ICT機器の活用についても、夏季休業期間中に実践交流することができた。 ◆ICT機器の活用については、授業への活用はもちろん業務の効率化のためにも、ミニ研修などをしてこまめに取り組みの交流を行い、教員の資質向上に努める。 ◆職員のニーズに合った研修テーマを設定し、日々の教育活動に生きる研修計画を立て、実践していく必要がある。	
F　社会に開かれた教育課程を支える風土の醸成 ○地域ボランティアと連絡を密に取り、相互に効果が生まれる連携。 ○教師の専門性を生かして、教科担任制を推進していく。 ○小学校と中学校とで、連携を強化する。	・広い分野で多くの学校支援ボランティアの活用を推進する。	・ボランティアとの交流を、単元構想に位置付けて、年間を通して計画的に行えるようにしていく。 ・コロナ禍における連携方法を模索する。 ・コーディネーター的な地域人材を発掘する。 ・学校地域運営協議会において協議する。そして、それぞれの役割について確認していく。	◇感染対策を行いながら地域の方にミシンボランティアとして学習支援をしてもらうことができた。また、図書ボランティアによる図書室の環境整備、登下校の安全指導など、温かく見守っていただいた。 ◇学校地域運営協議会において、児童の学校生活の様子や学校のコロナ対応の様子の見学を通して、児童や学校運営について意見交流することができた。学校、地域、保護者がそれぞれの立場で、児童に対する役割や連携することの意義について話し合う機会を持つことができた。 ◆ボランティアの活用を単元構想に位置付けて計画的に行うことができなかった。 ◆地域ボランティアと学校をつなぐ、コーディネーター的な人材を今後も探していく。	B
	・教科担任制の充実により、基礎学力の向上や中学校への円滑な移行を図る。 ・小中連携の強化（相互校の実情理解、児童会生徒会交流、生徒指導情報共有など）をする。	・交換授業による教科担任制の授業を実施する。 ・中学校からの出前授業を実施し、円滑な小中接続に努める。 ・本校の研究授業や研修について、中学校にも案内し交流する。 ・生徒指導上の情報を共有し、連携を深める。 ・取り組みの評価を共有し、それぞれの学力向上につながるような指導、連携作りに努める。	◇専科教員と高学年担任の交換授業による教科担任制で、教師の専門性を生かした授業を行うことができ、児童は興味を持って授業に臨んでいた。 ◇小中連携の意見交流会で、生徒指導上・特別支援上の視点で情報交換を継続的に行っている。 ◇全国学力・学習状況調査の合同分析を行い、課題と取り組みの具体について共有を図った。 ◇中学校教員による出前授業や中学校生徒会による中学校生活についてのプレゼンやあいさつ運動など中１ギャップ解消に向けた取り組みができた。 ◇コロナ禍で制限がある中、オンラインで小学校の授業を関係学校園所に公開することができた。 ◆コロナ禍が落ち着けば、研究授業の交流や児童・生徒の交流を積極的に計画したい。 ◆今年度は特別支援コーディネーターの交流があまりできなかったので、コロナ前のように連携できるようにしていきたい。	